

氏名(本籍)	おのせまさひと 小野瀬雅人(茨城県)		
学位の種類	教育学博士		
学位記番号	博乙第640号		
学位授与年月日	平成3年1月31日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
審査研究科	心理学研究科		
学位論文題目	入門期における書字技能の習得に関する教育心理学的研究		
主査	筑波大学教授	教育学博士	福沢周亮
副査	筑波大学助教授	教育学博士	太田信夫
副査	筑波大学助教授	教育学博士	新井邦二郎
副査	筑波大学教授		高森邦明
副査	筑波大学教授		中司利一
副査	筑波大学教授	教育学博士	市村操一

論文の要旨

〈本論文の構成〉

本論文は、6章、本文137頁、引用文献等36頁、図表26葉より成っている。

〈本論文の目的〉

本論文は、教育心理学の一領域である教科心理学の枠組みの中で、書字学習の入門期において一般に行われている指導法(なぞり、視写)を取り上げ、それらによる書字技能の習得に及ぼす効果を実証的に検討すること、及び書字学習の入門期における最適条件を明らかにすることを目的とした。

〈本論文の方法と結果〉

1 なぞり、視写、自由書字の発達の検討(実験1)

実験1では、幼稚園児、小学校児童(1, 3, 5年生)、大学生を被験者として、入門期の書字指導用ワークブックで用いられることが多い、なぞり課題(点線で描かれた文字、図形をなぞる)と視写課題(モデルとなる文字、図形を見ながら書く)及び自由書字課題(モデルとなる文字、図形を数秒見た後、モデルを見ないで書く)におけるパフォーマンスの検討が行われた。

その結果、低学年では書く際の視覚的手掛かりが多い課題ほど、つまり、なぞり、視写、自由書字の順で、得点が高かったが、課題間の得点差は、学年が進むに従って縮小する傾向がみられた。また、書く際の手掛かりの有無にかかわらず、同程度の字形が書ける時点(視写課題と自由書字課題の得点が同じになる時点)を書字技能の達成点(その発達段階の頂点)とみると、片仮名文字の書字技能は3年生から5年生に達成されることが明らかにされた。

従って、なぞり課題や視写課題による書字技能の習得に及ぼす効果の検討は、3年生以下の段階で行うのが適切と確認された。

2 入門期における指導法の検討（実験2～4）

実験2、実験3では、小学校1年生、幼稚園児を被験者として、片仮名文字のなぞりまたは視写による練習を取り上げ、それらの、自由書字課題での評定得点を測度とする書字技能の習得に及ぼす効果が検討された。仮説はいずれの場合も、「一般に行われている書字指導の実態および一般の考え方にしたがえば、書字の入門期にある幼児・児童が、新しい文字を学習するときには、導入課題として『視写』よりも易しいと考えられる『なぞり』で練習するほうが、書字技能の習得に対して効果がある」であった。

その結果、小学校1年生と幼稚園児の2つの教育段階にある被験者について、いずれの場合も、事前テストの得点が低かった書字技能の低い群では、なぞりの練習よりも視写の練習のほうが有効であることが明らかにされた。

実験4では、幼稚園児を被験者として、文字様図形を材料に、なぞり及び視写の効果に対する筆順の影響が検討された。その結果、筆順教示の有無に関係なく仮説は支持されず、視写のほうがなぞりよりも優れていることが明らかにされた。

なお、実験2と実験3の結果について、性差を検討したところ、実験1と同様、性差は認められなかった。

以上から、書字の入門期にある幼児・児童にとっては、従来の考え方とは逆に、また、筆順の有無、性差に関係無く、なぞりよりも視写による練習が書字技能の習得に有効に働くことが明らかにされた。

3 視写による書字技能の習得に影響する諸要因の検討（実験5～12）

実験5～12により、視写による効果に影響を及ぼすと考えられる以下の諸要因が取り上げられて検討が行われた。①なぞりとの組み合わせ、②文字のサイズ、③付加的手掛かりの有無、④転移。

実験5では、小学校1年生を被験者として、なぞり群、視写群、なぞりと視写群、視写となぞり群、統制群の5群で、また実験6では、幼稚園児を被験者として、なぞり群、視写群、なぞりと視写群の3群で、上記①の「なぞりとの組み合わせ」の要因について検討が行われた。その結果、入門期を過ぎた段階では、なぞりから視写への順で練習すると最も大きな効果が得られるが、入門期においては、この順で組み合わせても視写のみの練習以上の効果は得られないことが明らかにされた。

実験7では、幼稚園児を被験者として、大きいサイズの文字で練習する群（サイズ大練習群）、標準サイズで練習する群（サイズ標準統制群）、大きいサイズから段階的に標準サイズに変化する中で練習する群（サイズ変化練習群）の3群で、また実験8では、幼稚園児を被験者として、実験7と同様のサイズ大練習群でテスト課題のサイズが異なるという条件を取り入れて、上記②の「文字のサイズ」の要因について検討が行われた。その結果、視写の練習でのサイズは、手先の動作の負担が小さく細部まで見やすい大きいサイズの文字から、段階的に小さいサイズの文字へという系列が有効であること、テスト課題のサイズは関係がないことが明らかにされた。

実験9では、幼稚園児を被験者として、視写による練習の際に、開始点、終了点、方向転換点の手掛かりを加えることの効果、つまり上記③の「付加的手掛かりの有無」の要因について検討が行われた。その結果、付加的手掛かりがある視写練習群とない視写練習群との間に差はなく、これについて、視写の練習の中に、ここで取り上げた手掛かりについての情報を処理する過程が含まれていると考察された。

実験10、実験11、実験12では、いずれも幼稚園児を被験者として、視写による転移の問題、すなわち上記の④の要因の検討が取り上げられた。

実験10では、特定の文字の練習が練習しない文字を書くにあたって技能として転移するか否か、また、それがどの程度保持されるかについて、実験11では、文字の要素を含んだ文字様図形の視写の練習が練習経験のない文字を書くにあたって技能として転移するか否かについて、実験12では、文字の要素である、縦線、横線、斜線、曲線等を視写する練習が、練習経験のない文字を書くにあたって技能として転移するか否かについて、検討が行われた。その結果、特定の文字、文字の要素を含んだ文字様図形、文字の要素についての練習は、練習経験のない文字を書くにあたって技能として転移することが認められた。しかし、練習したのと同じ文字を書くほどの効果は認められなかった。

4 理論的背景の検討

現在多くの運動学習の説明に適用されている閉回路理論とスキーマ理論に基づいて、本論文の実験結果が検討された結果、スキーマ理論からの説明が妥当であることが明らかにされた。

5 まとめ

以上により、書字の入門期においては、なぞりから入るのではなく、視写を多く取り入れるのがよいこと、その際、比較的サイズの大きいものから徐々に小さいサイズのものを用いると更により効果が期待できること、また、就学前を含む入門期における書字についての運動スキーマの形式には、多種多様な図形や文字の視写経験が有効であることが、得られた知見としてまとめられ、これらは、教育実践への示唆として提出された。

審 査 の 要 旨

本論文は、書字学習の入門期において一般に行われている指導法（なぞり、視写）を取り上げ、教育心理学の立場から、実証的に検討したところに意義が認められるのであるが、特に、なぞりから入ることを否定して視写から入ることの有効性を認めた点は、この領域の研究を一步進めるものとして高く評価できる。また、これに関係する結果を得て、教育心理学と教育実践を近づける知見を提出した点にも大きな意義が認められる。

ただ、一方では、イメージ、認知などの概念の整合性については更に検討の余地が認められること、図形の評定の規準についても検討の余地があることなど、問題とすべき点も認められる。

しかし、教育心理学の中でも特に研究の困難さが指摘されている教科心理学の領域で、その研究の在り方を示すと共に水準の高い成果を得たことの意義は大きく、すぐれた研究と認められる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。